

貴い経験であった。私は、抑留生活でただ一つ得たものは、苦境に立っても耐え抜くということだけである。

私は、何としても祖国の土に辿りつきたかった、日本の土を踏みたかった。亡き戦友の分まで働いて人生を終わろうと思いつながら毎日を送っている。

しかし、戦争の恐怖や悲惨さ、戦後の今日になっても未だ癒えることない深い傷跡だけが残る悲しみを、身をもって体験している私は、「平和の尊さ」、これを守ることの重大さの認識が体に染みついて一人であると思っている。

また、絶対忘れてはならないことは、祖国のために尽くして、なお祖国に帰られなかった戦友たちの上に、今日の平和があるのだということであると思う。最後になったが永年思い続けてきた靖国神社参拝が、ちょうど戦後五十年の記念すべき年に、現在お世話になっている会社の本社表彰に招かれたため、実現出来、やっとほっとしているのである。

私の軍隊体験記（満州）

愛媛県 越智 壽

私は、大正八（一九一九）年二月二十日に生まれた。愛媛県西条市の本籍地にて、昭和十五（一九四〇）年二月十日、現役兵として徳島歩兵第四十三連隊留守部隊に入営、早速軍服に着替えたのだが、我々の服は新しい服、隣の班は古い服であった。そして、古い服の兵隊は内地勤務であり、新しい服の兵隊は満州行きであった。一週間後いよいよ満州へ出発である。徳島より列車で坂出まで行き、民家に分散して一泊。私は医者の家へ泊めてもらったが、大層もてなしてもらったことを今でも忘れない。

坂出港より約二、〇〇〇トンの汽船で、瀬戸内海は静かな波であったが、途中玄界灘では波が大きくうねるので、ほとんどの兵隊は船酔いをして、食事も口に入れず「ゲーゲー」と吐いていた。二月二十三日朝鮮

羅津に上陸、直ちに貨車に乗せられ、二、三日後、満州東安省虎林に到着、歩兵第七一二部隊に無事入隊をする。

満州の二月は極寒の時期であつたので、濡れた手で金物を掴まないよう注意を受けたが、乾いた手で掴んでも手がきつくくっついて、内地では考えられない事であつた。我々初年兵は入隊と同時に初めてのことばかりであつた。

軍隊というところは、一日の生活合図がラッパである。起床ラッパから一日が始まり、食事、訓練、また演習、内務班に帰れば古参兵の世話、洗濯、靴磨き、銃の手入れ、食事の用意、食後の後片付け等、休む暇もなく立ち働かなければならない。やがて消灯ラッパが鳴ってベッドに入ったかと思うと、教育係に起こされて精神訓話であり、班内の誰か一人がへまなことをすると、班内全員の責任だと言ってビンタが飛んで来る。軍隊という所は絶対に言い訳がきかないところである。その当時は人生の苦しみを一年間で味わつたと思つた。

新しい初年兵が入隊してきて二年兵になるまでは、辛い思いをしなければならぬ。満州の平地は原野、山は雑木が生えているばかりで、あまり大きな樹木は見当たらない。大興安嶺の山の方に行くと、自然林があるという。演習の時、山で飯盒炊飯する際に「満州では死体を焼かずに山へそのまま放置する」というので柩を壊して木を取り、それでご飯を炊いて食べた。もちろん柩を壊した時は觸體どくろみや骨等も出て来ていた。町の周囲はほとんど木を切つて焚き物にするので山には小木のみで、馬や牛の糞を乾燥させ、それを焚き物代わりにする風習があつた。

満州の冬は寒い。昼間でも零下一五度から三〇度、夜になると零下二〇度から四〇度、夜明け頃になるとさらに下がって零下四五度にもなる。真夏になると二〇度か三五度ぐらゐに上がるが、日陰に行くと空気が乾燥しているので、日本と違って案外涼しい。真赤な太陽が地平線から昇り地平線の彼方へと沈んで行く、これが満州の大地である。

初年兵教育も終わり、二年兵になつた昭和十六年一

月、我が部隊は饒河という所へ移駐することとなった。二月の極寒の時、列車に乗り虎頭まで行き、ここからは行軍である。荷物は満馬（ロバ、より少し大きい）に櫛を引かせ、満人を雇って運搬し、ソ連の国境近くになると夜まで待つて行動を起こし、一睡もせず歩きずくめで、眠りながら歩くことを初めて経験した。

満州では日本軍の移駐に反対する者もおり、また盗賊達が武装して治安を乱したりするので、日本軍も時々討伐を行っていた。中隊でも十五人程度の人員で巡視をしていたところ、木立の中で匪賊がテントを張って野営をしていたらしく、部隊が通り過ぎようとした時に、急に小銃やピストルで撃って来たので、直ちに軽機関銃と小銃で応戦後テントへ突入したら、女性一人の死体を残して逃走していた。

昭和十六年にドイツがソ連と交戦していた時、日本国もソ連への進攻の体制も整えていた（この動員を関特演という）。十六個師団で兵力百万人を満州へ集結させ、兵隊には食料と弾薬を支給して装備も整え、命

令一下出動することになっていた。もしソ連と開戦になったら恐らく現在の世界情勢は変わっていたであろう。しかし、我等の命も無くなっていたとも思われ、今日の私は無かったであろう。

この時、中隊では腸チフスが流行し、私を含め三十人ほどが入院していたが、入院患者には手榴弾二発を渡し、「いざと言う時には自決するように」と命令されていた。

三年兵になった昭和十七年四月、今度は左家店へ移駐を命ぜられた。同地付近の国境警備である。ここはソ満国境で、部隊の前にはウスリー江がゆったりと流れている。辺境の土地であり、駐屯地の周囲には民家が一軒も無い所に駐屯していた。総員八十人程度で任務は国境警備と望楼（高さ二〇メートルぐらい）よりソ連領を監視し、人や鉄道の動きを把握し、それを奉天にいる軍司令部に報告することであった。望楼の改修には大きな丸太を取り寄せ、前の望楼の高さ一〇メートルぐらいであったのを二〇メートルの高さに改修することになり、兵隊全員で組み立てたが、今のよ

うにユンボがあるわけでなし、ロープで吊り上げたが、それはそれは大変な苦勞であった。

この望楼も、ソ連が開戦をし満州国に進入して来た時は、一番先に砲撃され、吹っ飛んでしまった。この望楼にはいつも二、三人の兵隊が登ってソ連領を監視していたと思われるが、悲惨な戦死をしたものと思われる。

満州には狼が出没していた。兵舎にはあまり近寄らないが、夜になると、時には炊事場の残飯を食いに來ることもあったが、金物の音を立てると逃げて行ってしまう。また独特な遠吠えがあらこちから聞こえて、気味の悪いこと夥しい。昼は遠くで二、三匹移動するのを時々見かけるが、兵舎の近くには寄ってこない。

ある開拓団の人が隣の部落に行く途中狼に襲われたので銃で射殺したところ、死に際に悲痛な叫び声で吠え、これを聞いた金山の狼がそこへ集まって来て、その開拓団の人は食い殺されてしまったということで、決して小人数の場合には射殺しないで逃がせと古参兵

に教えられた。他の部隊では子供の狼を二匹ほど捕まえて飼っていたが、毎日肉を相当食べていたようだ。犬と違って人間には絶対に懐かない。子供でも人間が近寄ると噛みついてくる。

また、狸も出没する。冬は特に食べる餌が無いのでこれも炊事場の残飯捨て場に毎日來る。罾を仕掛けて一匹捕獲して、狸汁を作るため土中に三、四口埋めておこう（埋めておくと臭みが無くなる）と思ってツルハシで掘っても土が凍りついているので埋めることが出来ず、そのまま狸汁を作って食べようとしたが、臭いのなんの、とうとう誰も食べようとしなかった。

他の部隊では土の掘れる時に「落とし穴」を掘っておき、残飯を穴の上の通り道に捨てておいたら、何と五、六匹も落ちていたという。

また部隊ではいざというときに連隊本部へ連絡するために伝書鳩を一〇羽ほど飼っていた。たまには外へ出して運動をさせてるが、空を見ている時、大きな鷺が鳩を捕らえようとして追い掛け出した。鳩も死に物狂いで逃げるが鷺の速さには勝てない。捕まえられそ

うになると鳩は方向転回をして逃げるが、それを三、四回繰り返したが、ついに胸のあたりを引き裂かれ命からがら兵舎まで逃げ帰って来た。鷺は下に人間がいるので追跡を諦め飛び去っていった。鳩の傷口は兵隊が木綿糸で縫い合わせふさいだ。数日後不思議に鳩は元気になり、ほっとした。

また、体の弱い兵隊は部隊の勤務も出来ないのも、二、三人は魚釣りを毎日の日課としていた。ウスリー江の魚は、一本の荷造り紐に、木綿糸に釣り針を付けたものを何本も枝糸として取り付け、餌を付けて河に放り投げておき、翌朝引き揚げると、一本に何匹も掛かって上がってくる。時にはスッポンも二、三匹掛かっているの、魚屋経験の兵隊に料理をしてもらい、スッポン汁等も良く食べたものだ。ウスリー江では人間の大ききぐらいの魚も釣れることがあった。その頃の体重は六十三キロ程にも肥えていた。

防衛任務なのでいろいろな特別訓練が実施された。九死に一生を得た訓練は湿地訓練であった。左家店警備隊からは小生のほか一、二人が参加した。小生は本

部付であったと思うが、部隊は「野地坊主」を渡り前進していた。小生は近道しようとして「野地坊主」に飛び乗ったところ足を滑らせて深みに入ってしまった。首まで漬かっても足が届かない。「野地坊主」の草を掴み何とか自力で脱出しようとしたが、どうにもならない。もはやこれまでかと思えば望遠鏡を肩から外し泳ごうと思っていたところ、ちょうどその時、軍曹殿が通りかかり助けてくれた。軍曹殿がもう一時遅れていれば、お陀仏になっていたかも知らなかった。

昭和十八年三月、虎林第七二部隊に復帰、同年四月部隊交替のため虎林を出発、鮮満国境を通過、懐かの本土、下関に上陸、徳島歩兵第四十三連隊補充隊に転属、四月十七日満期除隊となり、無事我が家に帰ることとなった。

翌昭和十九年一月に結婚、新家庭を持ったと思ったら、その年の七月召集令状がきて、丸亀の連隊に入隊、同年十二月松山連隊区司令部に配属になった。連隊司令部下士官であっても営外居住になるのが普通であるが、戦局が逼迫しているので全員司令部内で起居

していた。司令部の下士官は全員軍刀を携帯することになっていたので、幾分偉くなったような気がして喜んだものであった。

ここで特に印象に残っているのは博多へ遺骨受領に行ったとき、神聖な任務であり、下士官二十余人が遺骨を首に吊り、隊伍を整え、肅々と歩行していると行き交う人々は皆手を合わせて拜んでくれたが、何とも言えない厳肅な気持ちがあったものである。

松山の空襲は昭和二十年六月頃だったと思う。当日夜暗くなって空襲警報が発令され、まもなくB29の爆音が聞こえたのだが、今夜はいやに爆音が近いなと思ったところ、まず松山市の東南古町方面に焼夷弾が投下された。一つの大きな火の塊が落下して来るや、途中で何十本にも分かれ、四方に飛散して落ちて来る様は、まるで花火のような美しさであった。しかし地上に落ちるや否や火の手が上がり、木材で造られている日本の建物は、ひとたまりもなく燃え上がる。

焼夷弾はまず街の周囲から落とされ、住民が逃げられないようにしておいて、街の中心部へと移ってきて

た。司令部の建物や周囲にも相当落下してきたが、我々の必死の消火活動により、最後まで人や物には何等被害は受けなかった。しかしよく直撃を受けなかったものだと、後から考えれば冷や汗の出る思いであった。

街は火の海となり、火が風を呼び風が火を呼んでゴーゴーと嵐のような音がしているのを忘れられない。また近くにある城山の木にも火が付き、山一面火の海となっていた。翌朝堀端の堤防が上がって見ると、道後の温泉街まで一望に見渡せ、建物は焼失して何一つ残っていなかった。道を歩いている人達は火傷をしているのか頭や手にボロ布を巻き痛ましい姿で茫然自失の体で彷徨していた。おそらく家族を捜していたのだろうと思われた。

また堀端の防空壕には直撃弾を受けたのか、五、六人重なうって死んでおり、水の中にも死体が幾つか見えた。この時ぐらい戦争の悲惨さを痛感した時はなかった。しかし、幸いなことに城山の天守閣は焼け残っていたが、下界の惨状とは対照的な真っ白な城の姿が、

戦後五十数年経った今でも脳裏に焼き付いている。

終戦と共に召集は解除され、その後、電力会社に三十余年勤め、六十一歳で無事退職し、現在は神職として石岡神社の宮司として国家の安泰と我が国の平和、否世界の平和を祈って毎日を送っております。

北満国境警備と初級士官教育の

体験について

山形県 寒河江 達雄

私は、明治四十五（一九一三）年三月三十日、現在の山形県東根市、当時の旧・長瀨村で生まれた昭和七年度徴集兵です。徴兵検査の時は体を壊していたため体位は良かったのですが第一乙種合格でした。

次に私の軍歴の概要を述べます。

昭和十四（一九三九）年八月、歩兵第三十二連隊留

守隊に応召（ノモンハン事件召集）。

昭和十五年十二月、兵科甲種幹部候補生合格。盛岡予備士官学校へ入校、昭和十六年七月同校卒業。

昭和十六年八月、歩兵第一三二連隊に編入を命ぜられ大阪港を出帆。満州北安（歩兵第一三二連隊）

着、同地警備。

昭和十六年十二月、黒河省山神府付近警備。

昭和十七年六月、黒河省神武屯の原隊に帰隊し国境警備。

昭和十七年十一月、前橋予備士官学校付に補される。

昭和十九年四月、東部軍教育隊付に補される。

昭和二十年九月復員。

応召時の私の家の職業は農業でした。

父は昭和十一年、四十九歳で死亡しており、家族は、母と私の下に二人の弟がいました。私の応召は母には大きな苦痛と悲しみでしたが、時局柄「男児の本懐これに過ぎず。勇躍聖戦に赴く」という世相でした。

前述のとおり、昭和十四年八月、山形連隊へ応召入